

十月十四日、間島市歩兵第二四八連隊に転属

昭和二十年七月、ソ満国境警備を命ぜられ陣地構築作業に従事

八月九日、突然、ソ連軍が参戦し、大型戦車と機械化部隊を従えて越境進入したため交戦するも、空しく敗退

九月四日、間島の二四八連隊で武装を解除、ソ連軍の指揮下に入る
十月二日、貨車にて十日後、ホルモリンに収容される

昭和二十二年十一月七日、信濃丸に乗船。十日、舞鶴港上陸、現役除隊、復員

昭和二十三年七月八日、延岡市役所に奉職

昭和二十六年、腎臓結核を発病、入院手術

昭和二十七年、結核性の脊髄カリエスで入院

昭和二十八年三月一日、長期療養のため休職

昭和三十年一月十二日、軽快退院で復職

昭和五十七年三月三十一日、市役所を定年退職

昭和五十七年四月一日、延岡公共職業安定所高齢者職業相談員を拝命（六年間勤務）

昭和六十一年四月一日、宮崎県婦人少年室協助力員拝命（四年間勤務）

平成元年四月一日、延岡市シルバー人材センター理事
拝命（三年間勤務）

趣味

歴史研究、短歌会員として地元で指導中

（宮崎県 大野 梅吉）

不発弾だった関特演

沖繩県 當 真 莊 平

昭和十六（一九四一）年七月十五日臨時召集（関東軍特別大演習―関特演）により、二十一日、西部第二十一部隊野砲兵第六連隊に応召。

そのとき、私は沖縄新報記者として那覇職業安定所より特派され、枕崎鋳業所、倉敷紡織工場、神戸製鋼所を視察していた。沖縄工員の就職状況をレポートして、新聞に掲載するためであった。突然飛び込んできた召集令状（赤紙）で私の出張日程は中止され、新聞記者としての任務も終わらなければならなかった。神戸製鋼所社員より令状を受け取り、空路帰郷し、松山町の沖縄連隊区司令部に出頭し応召手続を終え、帰宅した。

その日の夕方、新聞社の静かな出征激励会に顔を出し、當真嗣合専務や社員の激励を受け、翌日の深夜、関東州大連（タリエン）に向け商船で出発、朝鮮の釜山を避け迂回して、租借地である大連に上陸した。その後、七月二十六日、関東防衛軍が創設され、陸軍中将山下奉文を軍司令官に任命し、二日後の二十八日、満州国にある米英の資産を凍結し、戦力、経済力の振興を図るための関特演であることがわかった。

一方、英米の首脳、ウィンストン・チャーチルとフランクリン・ルーズベルトは、夏のある日、洋上で秘

密会談を開き、戦争目的の共同宣言を八月十四日に発表、我々が興安丸で門司港を出発した日である。欧米の巨頭たちの陰謀が渦巻いているとき、我が部隊は風雲急を告げている満州国に駒を進めたわけである。したがって、日ソ中立条約や米英の諜報網にひっかからないためにも、朝鮮半島よりの進駐を避け、遼東半島に上陸したわけで、大連に上陸後、市内の朝日国民学校にて軍装を解いた。

二日後の十九日、軍用列車で満州国領に入った。軍用列車といっても満鉄の有蓋貨車である。列車は北に向かつて進んでいるらしい。南に向かつて進めば北支である。列車内の床にはワラや干し草が敷かれており、その上に毛布を敷いてごろ寝した。人員過剰で、横にならないと寝られなかった。三十代の男の体臭が車内に充満してきた。酸っぱく、かび臭いにおいが鼻孔に入ってきた。列車の扉を開放するのは禁じられていたが、時たま空気を入れ替えるために二尺幅ぐらい開けた。軽いさわやかな涼風が勢いよく入ってきた。反対側の扉も開けてあるので、顔面をかすめる風は柔

らかさの中にも強さを感じる涼風である。

初めて見る満州国の広さにびっくりした。せせこましい沖繩の景色とは、比較しようにも比較の尺度が合わなかった。延々と広がっている畑の中に咲いている向日葵は、まだ満開とは言えないが黄色の丸い花が映えて輝き、実を結びかけている玉蜀黍、高粱の細長く青い葉がサラサラと風に揺れて涼しそうだ。遙か遠く城壁が浮いているように見える。次から次へと流れ去ってゆく満州の広大なすばらしい景色に魅せられた。

時たま用便時間があつて列車が駅に停車すると、部落から飛び出してくる小孫児（ショウハイ）や姑娘（クニーヤン）たちが列車の下まで押しかけ、煙草をせびっていた。我々が与えた「ほまれ」に火をつけて、満足したように喜んだ表情で紫煙を口中深く吸い込み、すーと吐き出した。八歳の前髪を垂れた女の子供でも、もう喫煙するのかと驚くはかばかしくなかった。

四日間も列車に詰め込まれた身体は、しなびた菜っ葉というよりネジの緩んだロボットのようになっていた。列車から飛び降りると背伸びしたり、「ああ」と

大声を叫んで身をそらす者もいた。支那事変帰りだという古兵に「気合いがたるんだぞ」と注意をされる者もいたが、長途の列車の旅ですっかり緊張もほぐれ、ふやけた身体になっていた。

八月二十二日の昼前に列車は東安省の滴道に停車した。暫時休憩の後、「輜重車降ろせ」の号令とともに全員作業にかかった。一時間余で作業終了。輜重車一両に六人の兵隊が引いたり押したりして、畑の中、原野、峠を越えて行軍を続けていたが、夕方近くになつて突如氣象異変が起こり、霰^{あられ}混じりの豪雨が降り注ぎ、真夏というのに気温は氷点下まで下がり、疲労と空腹のため四人も凍死したことは、沖繩から来た兵隊どもを驚かした。

大連までの輸送は日本の輸送司令部が当たり、満州国領に入ってから満州鐵路警護軍が高射機関銃隊を編成し、列車対空警戒に当たっていた。つまり、関特演に動員された部隊の輸送は満州国の東部、北部に集中していたが、秘密漏洩防止、ソ連軍を刺激しないようにと注意を払い、七月二十四日より九月十四日まで

に、三十万余の将兵や兵器を輸送したと言われている。だから、関特演の急速輸送には、関東軍、満州国軍、満州鐵路警護軍、関東憲兵隊、満州独立守護隊、各地域の鐵路警護団が水も漏らさぬ連絡を取り合い、集中的に治安警備に当たっていたため、非武装列車で無事任地に着くことができたと思ったのは大きな間違いであった。

実は命令受領をした下士官の不手際で駐屯地の駅の間違え、部隊は雞寧から一つ手前の滴道という部落に下車させられた。間違いだと思いづいた時は、列車は滴道から雞寧を通過し、虎林に向かっているときで、やむなく完全軍装を満載してある三八式輜重車を人力で牽引することになった。八人で一車両にかかった。満州の村落には幅二メートルぐらいの農道が通っているだけであり、雨が降れば泥路になる黒土道路ばかりであった。三八式輜重車の通れる幅員はなかったので、荒野の道なき道を行くしかなかった。高さ百五十メートルほどの峠を越して小休止に入ったところ、大粒の雹が降り出し、気温が急に下降した。大豆粒ほどの大き

さの氷塊が頭上や顔面に激しくたたきつけてきたので、私は車両の下にもぐり込んだ。空を見上げると、群がる雷雲が物凄い速さで流れ、雲間から白い氷塊がこぼれるように降り落ちていた。八月だというのに雪でも降るのだろうかと思った。急激に冷え込んで、指先がジーンと縮かんできた。

三十分後、出発の号令が出たころ、雷雲はすっかり流れ去って雲間から光が降った。車両の下に隠れていた戦友が息を引き取ったというのを聞き、びっくりした。しかも四人で、奇しくも沖繩出身も二人あった。下士官の不手際の犠牲になったわけだ。この峠を忘れないために、兵たちは「辛島峠」と名付けた。部隊長は辛島少佐だったので。

雞寧の街にたどり着いたころ日も暮れかかり、雷雲が再び低くなっていた。突然大粒の雨が降り出し、三八式輜重車は泥路にめり込み、牽引できなくなってしまった。やむを得ず、開拓団の家に雨宿りすることになった。寒さと空腹に疲労しきっていた兵たちは、開拓団員の炊き出しの御飯でやっと元気を回復し、街は

ずれの駐屯地にたどり着き、軍装を解いた。雞寧はソ満国境の街で、高さ約五百メートルはあろうかと思われる鶏冠山の麓で、東北の人たちで組織された開拓団の入植地であった。

駐屯間もなく、部隊名は満州第七〇〇〇部隊と改称され、私は第五中隊に編入された。昭和十九年十二月までの約四年近く、雞寧を中心として虎林、虎頭、綏芬河など、東部ソ満国境警備に当たってきた。

記録は後戻りするが、昭和十六（一九四一）年十月十五日、第三次近衛内閣総辞職後、予想されたとおり組閣の大命は十八日、陸相東条英機大将に下った。首相と陸相を兼任したのである。名実ともに日本は軍国主義国家として歩み始めた。「国民皆兵」を打ち出し、十二月一日、御前会議で対米英蘭戦へ突入することを決定。ここで関東軍の北進論は中止となり、我が満州第七〇〇〇部隊も戦わない自衛軍になり、大隊本部、第一、第二、第三、第四の各中隊は二十三日、奉天省海城に移駐し、平時の駐屯部隊となる。満ソ国境の第一線には、第五、第六の二個中隊だけ残留し、雞寧軍

司令部の直轄中隊になった。いつ進軍ラッパが高らかに鳴り響くだろうか、そう考えると、心の中に炎のような赤いものが燃えるのを覚えた。三十歳の初年兵が冬將軍に勝てるだろうかとも思った。冬でも気温は八度以下に下がらない沖繩から、急速に氷点下三十度までも下がり、森羅万象ごとく凍結する寒冷地帯に来て、寒冷作戦に強いソ連軍に勝てるだろうかと考えたりした。

さらに、他部隊の進駐や既存の関東軍の編成替えなどがあり、関東軍は膨れ上がり、名実ともに七十余の精強部隊に増強されているという情報が流されていた。しかるに九月六日、近衛内閣は緊急御前会議を開催し、日ソ不可侵条約を尊重し「ソ連軍とは交戦せず南進するのみ」という閣議決定を下している。しかし、雞寧に駐屯して一カ月足らずであり、兵舎が完成し、軍馬も入ってきたばかりであるのに、除隊帰還するとは思われなかった。

クレムリンの首相執務室で軍服姿のスタリリン大元帥は、兵棋（五千分の一の地図の上で隊標を用いて戦

術戦略を謀ること）中であり、「オーチン、ハラショー（大変よろしい、うまくいったぞ）」と、テールブルの上にある地図をたたいて躍り上がった。「シベリアの極東軍を欧州戦線に移動させよ」と叫んだのである。

そのころ、独ソ戦線はどのような形勢を展開していたかを調べてみると、昭和十六年六月二十二日、奇襲攻撃に成功したドイツ軍は、ポーランド軍を軍靴で蹴散らし、一カ月後にはソ連の宝庫ウクライナのキエフと白ロシアの中央を進撃して、モスクワを指呼の間に制圧していた。ヒトラー総統の電撃作戦によって広大な領土の奥深く踏みこまれ、窮地に陥っていたスターリン大元帥は激怒し、焼土作戦によるゲリラ戦術で徹底抗戦を全人民に号令していた。そして、米英に対して新鋭の兵器と軍需品、軍資金までも貸与して欲しいと哀願を続けていた。昭和十五（一九四〇）年九月二十七日、日独伊三国同盟が成立し、大詔が渙発されていたにもかかわらず、近衛内閣はなぜヒトラー総統の要請（日独電撃作戦）にはこたえず、ソ連領への進撃を中止したのだろうか。近衛内閣の朝令暮改とも言

うべき、前記したとおり「ソ連とは交戦せず」の作戦変更によってソ連は命拾いしたわけである。

関特演によって満ソ国境に釘付けにされていたソ連極東軍は、翌日より欧州戦線に移動を始めた。氣息奄々のスタリן首相は熟慮する余裕さえもなかった。速戦即決の戦術を全軍に号令し、戦車兵団をはじめ最強の歩兵部隊を欧州に派兵し、満ソ国境には防衛軍をとどめることにした。

反共主義国であるアメリカ、イギリスが、なぜソ連を援助したのだろうか。それは言うまでもなく、強敵ヒトラー軍を打たしめるためだった。もしソ連が降伏すれば、ヒトラー軍は米英を攻撃することは決定的であり、米英首脳はそれを恐れていたからである。もしヒトラー総統の率いる大軍と梅津美治郎大将の指揮する関東軍が東西より挟撃作戦を展開していたら、ソ連の崩壊は決定的となり、シベリア極東地方と沿海州（プリモルスキー）、樺太全島（サハリン）は日本の統治下に入り、森林、石炭、金、岩塩、小麦などの資源が手に入っていたであらうし、北方領土の歯舞、色

丹、国後、択捉島の返還要求など起こらなかったであろう。

満蒙やシベリア大陸、欧州戦線で、食うか食われるかの大きな作戦のあったことは知る由もなく、我々は日夜、軍務に精励し、死生苦楽をともにする軍人の家庭と言われている内務班で、古兵や班長から「気合い」を入れられ、時には古兵たちから不条理な錬磨でみっちり鍛えられていた。だが、その錬磨によって強固な団結が完成し、戦友愛と相互信頼が育まれたのは事実である。確かに軍隊は個人の自由を認めない特殊地域であり、社会一般の通念では考えられないこともあった。

輜重隊としての戦闘装備も完成してきたので、ソ連を仮想敵国として演習が連日続行され、雪中行軍、夜間演習、道路作業、陣地構築などに、兵隊は他部隊と協力するための分遣隊に編成されるなど、慌ただしくなっていた。関特演は三カ月で終了すると言っていた兵隊たちの声も、いつの間にか耳にしなくなっていた。

そのころ、近衛内閣は米英より、支那からの全面撤兵を迫られており、重慶に撤退し徹底抗戦を叫んでいる蔣政権に、仏印ルートとビルマ・ルートから軍需物資を補給し続けている米英の援助ルートを断ち切るための仏印進駐を決定していた。米英は仏印進駐の報復手段として、オランダを説得し、インドネシアに対し日本軍への石油禁輸の強硬手段をとらしめたのである。石油資源皆無の日本は、遂に戦争遂行のために必要な石油輸入のルートを失い、窮地に追い詰められてしまったのである。米英仏蘭印は共同戦線を構築し、日本の孤立化を策略したのである。これがすなわちA B C D包囲作戦である。

インドネシアの石油が手に入らなければ、対ソ作戦はもちろん、蔣政権との戦闘も放棄しなければという近衛首相の意見に対し、東条陸相は首を横に振り、支那戦線から撤兵する意思はないと拒否した。陸海軍の対立などもあって、十月十六日、近衛内閣は総辞職し、十八日に東条英機内閣が成立した。ハト派からタカ派に交代しても対ソ作戦はとらず、専ら米英打倒論

が台頭し、関特演は次の作戰要綱が確立するまで駐屯することになったが、対ソ作戰上は、信管を抜き取られ、皆れ高き藍色の軍隊も遂に不発弾となったと言える。それは、スターリンの率いる共産軍を背後より攻撃しないということであった。

昭和二十年八月六日、突如として米軍B29の爆撃機は広島市上空から原子爆弾を投下した。熱風を巻き起こし、濛々と立ち昇る妖雲のような爆弾は、一瞬にして市内のすべての物を燃え尽くし崩壊させたのである。時の米国大統領こそ世界戦史上最悪の戦犯である。この驚くべき戦犯を耳にしたスターリンは、二日後の八月八日、夜明けとともに対日宣戦を布告したのである。時の総司令官は、独軍を殲滅したワシレフスキー元帥である。

八月十日、大本営は対ソ作戰開始を決定したが、時既に遅く、ソ連軍は緩芬河の国境線を突破し、日本軍の通信網を破壊し、避難中の婦女子を射殺している。男子は十五歳より六十歳まで、女子は十七歳より四十歳まで国民義勇兵役法により召集、未教育補充兵二十

万が関東軍の各部隊に配置されたが、軍服、軍靴も支給されず、もちろん兵器もない、文字どおり私服を着用した丸腰の兵隊ばかりが集結した。最後のあがきというものだろうか。日本の敗北は決定的となり、中国残留日本人孤児問題は、平成の今日まで続いている。

雞寧より樺林に兵舎を移していた第七〇〇部隊は、第五軍司令部命令が下され、第一中隊を先陣として、次々に営門を出発した。中隊長藤井和吉中尉は馬（日本馬）上で右手に持った軍刀を高くかざし、「前んえー」と号令を下した。兵隊は食糧、兵器などを満載した三八式輜重車を引っ張っている使役馬の手綱をしっかり握り、ガラガラ、ゴトゴト音を立てて、幅五メートルの砂利道路を進んでいた。私は衛生兵長として中隊の後尾に付き進んでいた。

営門より百メートルを進んだころ、突如藤井中隊長は先頭から大声で「ソ連の戦車だ、我が中隊目指して幕進してくるぞ」と叫びながら、中隊の最後尾まで馬を走らせてきた。すかさず「全員乗車、目的地は牡丹江の掖河だ、疾走せよ」声高らかに命令するや否や、

再び中隊の前方に向かって物凄い速さで馬を跳ばした。このあたりは一望千里と続く畑と丘陵地帯である。右方に高粱畑があつて、その後方はなだらかな丘陵が延々と広がつていて、まだ朝もやの消えない高粱畑の間の鉄路の上をソ連の重戦車二両が、疾走する中隊に併行して驍進していることが確認された。

我が輜重隊の使役馬はチチハルで徴発した満馬で、驢馬と満州の在来馬との合いの子で、荷物運搬に適したいわゆる輓馬で、使役に慣れており健脚を誇つただけに、驍進する重戦車より速かつた。

丘の麓に点在する満人部落を過ぎ、樺林駅に差しかつた時である。屯営地から一千メートルは疾走しただろうか、私が乗つていた輜重車は、砂利のガタガタ道路に転がつていた大きな石塊に乗り上げたと思つた瞬間、私はあおむけに道路上に振り落とされ、アツという間に大きな車輪は私の大腿部の内側から腹部と左胸部に乗り上げ暴走してしまつた。私は後方から疾走してきた車輪をすかさずよけると死に物狂いで走り、やつと車輪に追いつき飛び乗つた。

それから一時間、無我夢中で敗走に次ぐ敗走の末、重戦車の追撃をかわしたと思つていたところ、なだらかな丘の麓の後方から重戦車が一両、我が中隊に長い砲門を向けていた。その距離は二百メートル内外だと察知したので、私は輜重車から飛び降り、道路より五メートル下の高粱畑の畦道あぜみちに飛び込んだ。戦友たちは「當真、危ないぞ、戻れ、戻れ」と叫んでいるのが聞こえたが、私はそのまま六尺以上にも伸びた高粱畑の中深く身を隠した。すると、私の前方を大腿部骨折であらうと思われる戦友が大きく膨張した足を引きずつて、高粱畑にもぐつていくのが見えた。衛生兵として、あの戦友を見殺しにしてよいだろうか、早く追いついて手当てをしてやらなければと思つたが、どうして高粱畑に飛び込んだか、自分でもわからない時でもあり、まず自分の身体が大丈夫であるかを確かめねばならない、それが先だ、そう思つて高粱畑の中で身を起こして後方を見ると、今まで地煙を吹き上げて猛進していた重戦車は発砲を止め、丘の麓の後方にバックしているのが見えた。彼我の戦闘が小止みになつてい

たので、高梁畑の中で下腹部と左胸部を五本の指で強く押してみた。痛みも感じないし、肋骨骨折もない。

腹部と胸部に内出血があると嘔吐を催すが、その気配もない。ホッとした。だが、このままじっとしてはおれない。「死んではならない」という考えがやっと思ひ浮かんできて、重戦車の射程距離内にあった中隊からはじかれるようにして高梁畑に飛び込んだ理由がわかった。生に対する本能的反射神経が私を高梁畑に飛び込ませていたのだ。しかし、私の瞬間的思考は当たらなかった。

下り坂に差しかった中隊の車両は猛スピード疾走し、ソ連の重戦車の射程距離外にたどり着いていたし、重戦車は攻撃を止めていた。早く中隊に追いつかないと敵に捕らえられてしまう。「生きて捕虜のはずかしめを受けるより死んだ方がよい」という戦陣訓を思い出した。死んではならないのだ、死をのがれるために高梁畑に飛び込んだのではないか、三十八歳の人生を終わりとくなく、精鋭関東軍として北辺の護りを固めてきたではないか……。自問自答、自ら発破をかけ

た。そう思うと、私は肩から吊るしてある「包帯ほう」をもう一度しっかり体にくりつけると背中に回し、中隊に追いつくため、高梁畑や向日葵畑の中に身を隠しながら、時にはじゃがいも畑を匍匐前進した。小一時間後、砲声が始まった。

中隊の輜重車の行方を確かめようと思い頭を持ち上げたとき、突如として鼓膜をつんざくような戦車砲の炸裂音が轟き、ビューッとという流弾が戦闘帽をかぶっている頭上をかすめていった。反射的に頭をじゃがいも畑の上に叩きつけた。全身が土にめり込むように伏せた。続いてビューズトン、ビューズトンと、まるで地獄の底から吹き上げてくるような地鳴りの轟音は生き地獄さながらである。次第に轟音は激しさを増してきた。砲煙弾雨の中で身動きもできなかった。

敵と友軍の陣地は濛々たる土煙に覆われているのが見えた。時間は刻一刻過ぎていった。もはや猶予はでないと思い、なおも匍匐前進を続けた。じゃがいも畑を過ぎ、高梁畑に差しかったところ、下には溝があり小川になっていたので、すぐ小川に飛び込み、強

力な敵戦車の死角に完全に身を隠すことができた。やっと戦火をくぐり満人部落にたどり着くことができた。

八月といえば満州の荒野と畑は濃い緑の世界で、身を隠すのに最適であった。部落にたどり着いてみると、右方に友軍の重砲大隊の陣地が構築されており、我が中隊を追撃してきたソ連の重戦車に擬装砲門を向けて砲弾を撃ち込み援護射撃していた。私は重砲大隊の援護射撃に救われたのだ。ソ連の重戦車が丘の麓の後方にバックしていたことも初めてわかった。

さらに前進すると、牡丹江省掖河の街はずれの広場では、砲弾を運搬している野砲兵や我が大隊が戦闘配置についていた。輜重隊は、戦闘中は後方陣地で糧秣や兵器、弾薬、橋梁資材、被服、馬糧などの輸送が任務となっていたので、三八式小銃や手榴弾が兵器で戦車と交戦することは、カマキリが走る車両に立ち向かうようなものだった。「緊急命令、我が部隊は横道河子に陣地を構築するため直ちに転進する」との命令が出され、Ｕターンして南下を開始した。私は「ソ連軍

に切り込む」という命令は擬装作戦だったのだと思った。敵の偵察機が旋回している昼間は前進し、上空から偵察できなくなった夜陰に乗じて退却を開始したわけである。

十四日早朝、ソ連戦闘機の空襲は再び開始された。道路沿いに転進する部隊に絨毯爆撃を浴びてきた。次第に機数が増え激しくなったので、部隊は散開して山野を越え河を渡り、時には高梁畑を横断し、夜を日について強行軍の末、第五軍の最終集結地の横道河子の陣地にたどり着いた。

終戦の大詔、玉音放送のあった八月十五日から三日後の八月十八日だった。「耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び」という天皇の玉音放送が十五日の正午、日本全国に放送され、日本の無条件降伏を決定づけた終戦の大詔が下され、東久邇宮に組閣の大命降下があったという情報が流れていた。「しかし、大本営からは停戦の公報はないではないか」「米英との戦争を停止したんだよ、ソ連との戦争は終わっていない」「そうだ、関東軍はソ連極東軍を撃破するまで戦闘を続け

るべきだ」と将兵はいきり立ち、なお陣地の構築をやめなかった。しばらくして、満州、朝鮮、南樺太の日本軍はソ連に降伏するよう、ルーズベルト大統領命令が大本営を通じて新京の関東軍司令部に伝達されたという情報が輜重隊にも伝わってきた。

関東軍は過去二十六年間、心血を注ぎ北方よりの侵攻を阻止していたのに、戦力を発揮できぬ間に壊滅するのかと思うと、今まで張り詰めていた戦意は、つぶれた風船玉のように全身からすーっと抜けていく衝動にとりつかれた。不安が心臓にじわりじわり広がっていて、次第に昂じてくると、「銃殺される」という幻想が頭をもたげてきた。三々五々、兵も、下士官も、将校も、どっかと草むらの中に倒れるようにへたばってしまった。心なしか顔色を失っていた我が中隊長は「ソ連軍の指示あるまで現地に待機することになった」と力ない声で全兵に伝えた。これからどうなるだろう。なすこともなく不安な日が続いた。

二十四日朝、横道河子を出発するという命令が下され、同時に武装解除された。三八式小銃、帯剣、手榴

弾、短銃、軍刀、機関銃、軍馬などが、ソ連将校立ち会いのもとに野営地の近くの広場に集積された。

我々は丸腰で出発した。横道河子、道林、山市、海林を経て、行軍また行軍の末、牡丹江省寧安県拉古に到着。拉古には日本軍の兵舎があつて無傷で残っており、臨時野戦病院も併置してあつた。ドイツ降伏後、満を持していたソ連極東軍総兵力百六十万余、米軍が長崎に原子爆弾を投下した八月九日早朝攻撃を開始し、わずか一週間で満州に駐屯している四十万余（三十万は南方に転属）の兵を制圧、二十六年間の歴史を持つ関東軍はあっけなくつぶれ、在満百五十万人の日本民間人は、血と肉と汗で築き上げた全財産をソ連軍に蹂躪されたのである。

五十年前のシベリア抑留に思う

沖繩県 当 銘 三 郎

去る第二次世界大戦、太平洋戦争で我が国は米ソに